

ろうじんりょく 路地力溢れる長屋

コンセプト

和歌浦、特に明光商店街周辺は車が通れないような路地が入り組んでいる。そこで私達が目にしたのは数人が集まって話している様子である。それは路地の角であったり、民家の庭先であったり様々である。なぜ路地は人を集めるのだろうか。私達が考える理由は「道が狭いため人と人の距離が近い」ということである。今回の路地の人の集まりやすさ、「たまり」のできやすさに注目した。そこで提案するのが「空き家」を「路地のたまり」のひとつにリノベーションしようとするものである。計画地域は災害時には津波の浸水域域となっている。ケーススタディとして計画した長屋は、災害時の避難場所や吹き出しの場としての利用を想定している。避難時には階段ともなる空き家を、日常から利用し、路地のように住民の生活の中に溶け込ませることで、有事の際スムーズな避難や災害支援が行えるのではないかと考えた。



①風光明媚な和歌浦

和歌山工業高校から自転車で10分の距離にある和歌浦は、古くから、万葉集にも詠まれるほどに、美しく風光明媚な場所である。その近くに明光（めいこう）商店街があり、和歌浦地区の中央、海岸通りを南北に貫く通りで、明治時代から続く和歌浦のメインストリートにあたる。「明光」の名は、聖武天皇がこの地を「明光浦（あかのうら）」と評んだことに由来するという。



②路地が残る地域

明光商店街から一本入ると、各家庭が育てる植木鉢や植栽が路地に溢れ出しており、住民同士は顔見知りのため、路地で話し込む姿がよく見られる。商店街に歩くと、住民の方々と触れ合っており、店先で話している姿など住民同士のコミュニティーも見られる。



③ヒアリングからわかる地域の生活

昔ながらのまちなみや路地が残っている一方で、住民にヒアリングすると、商店街はシャッターが下りる店が増えていること、空き家も多く存在する現状や、住民の多くが高齢者で、日常生活に関することのほとんどを地域内で解決していることがわかった。



④災害に対して考える

さらに地域について調べていくと、東南海大地震時には津波により浸水する場所が多く、入り組んだ路地は、空き家の倒壊等により、逃げ道を妨げ逃げ遅れの原因となり得ることがわかった。このことから、空き家を利用して、災害に強いまづくりをできないかと考えた。コミュニティーが色濃く残るこの地域内に避難の拠点になる所を作る必要がある。



⑤和歌浦の現状分析



⑥既存の建物について

空き家利用のケーススタディとして、浸水域域外にある長屋のリノベーションを行った。長屋の現状の建築物の構造を把握するため、実地調査及び元の居住者にヒアリングを行い、既存の建物を活用した。

設計対象とした空き家は概ねから建っており、長屋は狭小、トイレと洗面は2階を屋外に設け、共同で使っていた。全戸から構成される長屋で、1階と2階の両方から各階の住居にアクセスできるため、1階と2階では玄関の位置が異なる。

